

越後三十三観音霊場と地震との関係の解明に関する研究

正会員 ○深沢大輔*

越後	観音信仰	三十三
地震	活断層	発光現象

■はじめに¹⁾²⁾

三十三観音巡拝の始まりは、我が国に観音信仰が定着した8世紀の初期、養老2(718)年、大和長谷寺(奈良県桜井市)の徳道上人が西国にある観音霊場三十三ヶ所(「西国三十三所観音霊場」)を巡拝したのが最初とされ、それから270年後の永延2(988)年に花山法皇が再度巡拝されてから一般に普及したと伝えられている。また、観音菩薩の功德を説いた「観音経」の中に、菩薩が三十三様の姿を現して衆生を済度すると説かれていることから、三十三と言う数字が定められたとされている。東国の代表的な霊場である「板東三十三観音霊場」は、鎌倉時代初期に成立したとされている。その札所は鎌倉から始まり、広く関東一円に分布している。そして、西国と板東をあわせて百観音とするために三十四の札所を設けた「秩父三十四所観音霊場」は、室町時代に成立したと考えられている。

この三ヶ所が有名であるが、巡拝の路程が千数百kmにも及ぶ大規模な霊場は、実際に歩くと数十日かかり、費用も嵩み大変なため、一国や一地方、寺の裏山など狭い範囲で「写し霊場」を造る動きが全国的に見られるようになり、三十三体の乾漆像や木彫り像・石像等を巡拝する霊場が各地に設けられ、お参りが現在もされている。

ところで、新庄市から上山市にかけての山形盆地に広がっている「最上三十三観音札所」は、最上義光がこの地方を閉廷した慶長5(1600)年頃に、既にこの地で観音信仰が栄え、巡拝が行われていたと考えられている。その範囲の活断層図を見ると、新庄盆地断層帯-尾花沢断層帯-山形盆地西縁断層帯があり、重なっていることが分かる。また、中越地震で震度7を記録した新潟県川口町川口の宝積寺の裏山には、三十三体の石像を巡る約3.2kmの遊歩道を復活させる取り組みが行われている。これは昭和9(1934)年に同寺の先代住職が、西国三十三ヶ所霊場を巡拝した後、建立したものであるが、そこから北西方向に活断層があることが推定されている。

このようなことから、鎌倉時代の康元元(1256)年に北条氏五代最明寺時頼公が越後回国の折り、岩屋堂を最初に参拝し、三十三ヶ所を定めて巡拝したのが始まりとされている「越後三十三観音霊場」の活断層等との関係は、一体どのようになっているのか整理して見ることとした。

■越後三十三観音霊場

1. 巡拝コース：西頸城郡能生町の能生神社から海岸沿いに10km歩くと同郡名立町の第一番札所の岩屋堂に着く。第二番札所の摩尼王寺は、上杉謙信の春日山城を超えた新井市の郊外にある。第三番大泉寺から第九番広濟寺は現柏崎市に点在している。次に、魚沼方面に進み信濃川沿いの中魚沼郡川西町の第十番長徳寺に向かい、峠を越えて南魚沼郡塩沢町の第十一番大福寺・第十二番天昌寺を巡拝し、魚野川沿いに下って北魚沼郡堀之内町の第十三番弘誓寺、再び信濃川の広がる越後平野に入り、小千谷市片貝町の第十四番真福寺、長岡市柏町の第十五番千蔵院へと巡る。そこから、信濃川右岸の山裾の見附市の椿沢町の第十六番椿沢寺・小栗山町の第十七番不動院を巡る。次に西に向かって左岸側の三島郡に入り、三島町上岩井の第十八番根立寺に到着し、鳥越断層上を通り、気比ノ宮から峠を越えて海岸に出る。出雲崎町尼瀬の第十九番光照寺、寺泊町の第二十番照明寺、分水町の渡部の第二十一番吉田寺、国上の第二十二番国上寺と海沿いに北上し、県北の岩船郡神林村にある第二十七番光浄寺で山沿いに折り返して、県央五十嵐川の上流、奇岩八木鼻の麓にある第三十三番最明寺で終わる。この間、約650kmでマイカーでも3泊4日を要する巡礼の旅となる。
2. 札所の創立年：以下、能生神社と番外の5ヶ所の番外も含めて全39ヶ所の創立年について見てみる。

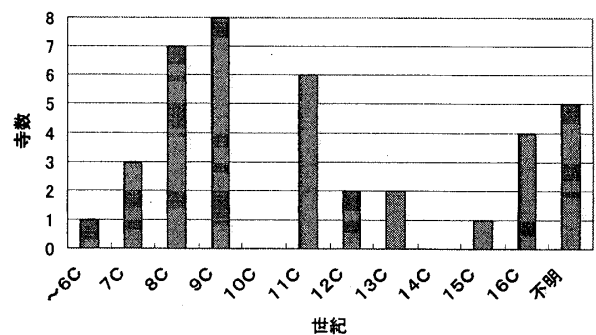


図1 越後三十三観音霊場の創立年別寺数

創立年不明の霊場が5寺見られるが、判明しているものは総て鎌倉時代以前で、能生神社は崇神天皇の世(-97~-28)と大変古い。札所としては第十一番の塩沢町長崎の大福寺が推古22(605)年と一番古く、その後創立が続き、9

世紀に 8ヶ所と一番多くなっている。これは、地震が現在 1,200 年周期の活動期に入っているとされているが、それとの関連で更に検討する必要がある。尚、その宗派は、改宗されている霊場も見られるが、真言宗 23(4)、曹洞宗 13(2)、浄土真宗 1、神道 1、不明 1 となっている。

3. 札所の観音像：図 2 は、同 39ヶ所に安置されている観音像の種別にその数を見たものである。

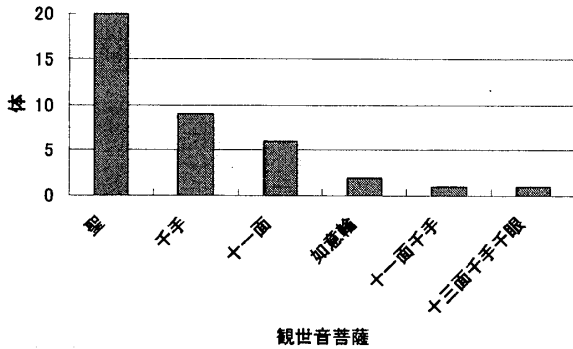


図 2 越後三十三ヶ所霊場の観世音菩薩の種別体数

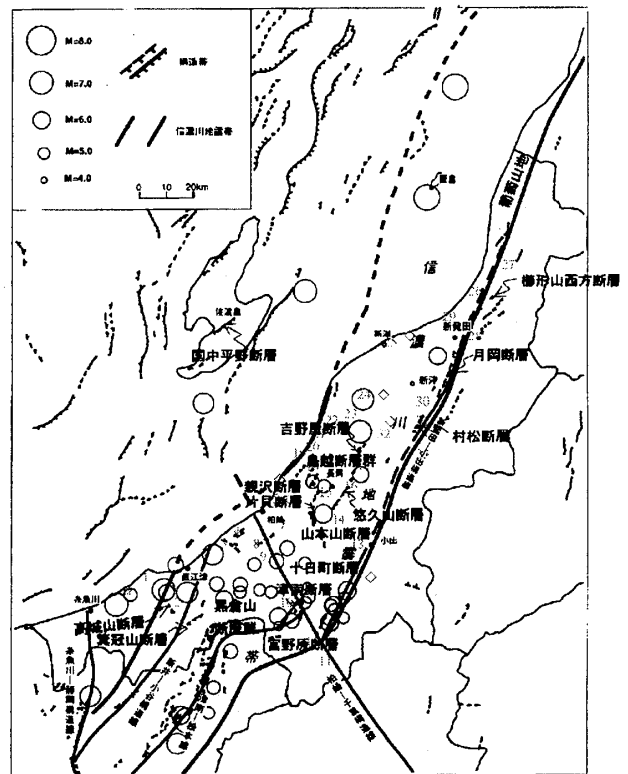
観世音菩薩 39 体の内、圧倒的に聖観音(餓鬼道の救い主)が 20 体と群を抜いており、続いて千手観音(衆生救済)の 9 体、十一面観音(修羅道の救済)の 6 体等となっている。次にそれらの制作者は、聖観音は、行基菩薩が 5 体、泰澄大師・聖徳太子・弘法大師がそれぞれ 2 体ずつ、その他となっており、大変古い。千手観音は、行基菩薩が 4 体、泰澄大師・聖徳太子・弘法大師・その他が各 1 体ずつとなっている。十一面観音は、聖徳太子が 2 体、泰澄大師・弘法大師・その他が各 1 体ずつとなっている。尚、第九番の広済寺の如意輪観音が石仏である以外、何れも乾漆ないし木造である。また、これらの中には秘仏とされているものが 9 体見られる。つまり、住職 1 代 1 回、60 年に 1 度、50 年に 1 度、33 年に 1 度、12 年に 1 度、10 年に 1 度、子年と午年の 8 月 8 日、2 月 18 日と 8 月 18 日、17 日が命日の如くである。

4. 霊場の位置と観音像の由来：霊場の位置を活断層等との関係から見てみると、全体 39ヶ所の内、1/2 強の 21ヶ所が関係していることが分かる。つまり、活断層(含伏在断層)の線上 6ヶ所、近傍 6ヶ所、延長線上 2ヶ所、背斜軸・向斜軸、背斜軸近傍・向斜軸近傍、信濃川(アムールプレート境界)左岸、地震段丘、境内の巨岩に北向きの亀裂、がそれぞれ 1ヶ所である。

これに対し、尊像の由来を見ると、「夜になると電光のように光りを放つ井戸があり、その中であつた古木で彫つた。」「奥州の逆賊高丸征伐の際、旗上に観世音が現れ光りを放って敵陣を照らした。」「当山の開眼法要の時、山上に北斗七星が輝き、周囲が明るくなった。」「玄徹禪師が柴の庵を結んで禅定のおり、観音が現れ、光りを放って飛び去った。その先を尋ね歩くと清水の底から観世

音が現れた。」「海に梵音が響き、波を雷鳴の如く震わし、光り輝くものがあつた。海から引き上げると観音像で、それを安置した。」「海上に毎夜光るものがあつたのを荒木甚助が近づいて見たら三尊像であつた。」「と言う如くの地震由来の発光現象を伝えているものが 6 体見られる。

図 3 は、新潟県の地震構造線と活断層並びに過去の地震発生ヶ所にその規模を○の大きさに示した図³⁾に、越後三十三観音霊場の札所番号等を記入したものである。活断層のある所は、谷になっている場合が多いので、遍路道が通り、札所の多くが自然とその近傍に立地していたものと推察される。



数字は札所番号、☆は出発点、◇は番外札所。

図 3 活断層等と越後三十三観音札所の位置

■ おわりに

越後三十三観音札所は、あまり知られていないが、新潟県内の要所に位置している。他に、県内には石像や木喰上人が彫つた像のある三十三観音札所等もある。これらの場所が札所として定められ、巡拝が行われていた意味や歴史について更に調べる必要がある。

■ 参考文献

- 1) 佐藤高・高橋与兵衛：越後三十三観音札所巡礼の旅、新潟日報事業社、平成 3 年
- 2) 倉茂良海：越後巡礼、真城院、平成 8 年
- 3) 茅原一也監修：新潟は安全か、新潟日報事業社、平成 5 年

*新潟工科大学工学部 教授・工博

*Professor, Niigata Institute of Technology, Dr.Eng.